

生涯現役で働くとは

鈴木さんは現在76歳、会社では最古参のチーフアドバイザーとして多忙な日々を送る。会社の経営理念である「お返し的人生」という言葉に深く共感する鈴木さん。洒落た

東京」から、町工場の現場カイゼンを相談されたことが起業のきっかけとなりました。新銀行東京はほかの銀行にはない魅力のアピールしたかったのでしょう。2005年には小森はまだ現役でしたから、私を入れて3名のOBに声がかかりました。当時自動車業界も不況の風が吹いており、私は63歳でセントラル自動車を定年退職、次のステップを考えていたときですから、新銀行東京の提携先企業でのカイゼン活動を個人で請け負う形でスタートさせました。当時5社ほどにかかわったと記憶していますが、「カイゼン」という仕事の需要があるということが驚きでした。私が歩いてきた自動車畑だけでなく、どんな職種でも製造現場が抱える問題は共通していることがわかり、カイゼンという仕事に俄然興味湧きました。小森は退任を待って起業、私も67歳にして新たな一歩をふみ出しました。気がつけば10年近い歳月が流れ、設立当初のメンバーは3人だけとなりました。最近ではホームページを見ての問合せも増えてきました。若いころ学んだトヨタ生産方式の経験をもとに、カイゼン指導というサービスを提供

する日々はやりがいがあります。

鈴木さんは現在76歳、会社では最古参のチーフアドバイザーとして多忙な日々を送る。会社の経営理念である「お返し的人生」という言葉に深く共感する鈴木さん。洒落た

高齢者の活躍で社会に風を

「カイゼン」するということは絶えず変化することだから、会社のトップのなかには変化を嫌う方も当然います。こういう方の説

第38回

生涯現役で働くとは



株式会社
カイゼン・マイスター
チーフアドバイザー
鈴木利治さん

鈴木利治さん(76歳)は、自動車業界の製造部門で研鑽を重ねてきた。半世紀近い豊かな経験を生かし、現在は中小企業に向けたコンサルティング業務の第一線に立ち続けている。鈴木さんの終生のテーマである「カイゼン」活動は、飽くなき変化を求めて終わることがない。そこに鈴木さん流の生涯現役の奥義があった。

モノづくりに魅せられて

私は1940(昭和15)年に桜の名所として名高い東京都北区・王子の飛鳥山の近くで産声を上げました。ただ、戦況が激しくなってきたので3歳のとき、福島県の東白川郡に疎開しました。結局、高校を卒業するまで過ごした棚倉町という城下町が私の故郷といえるかもしれせん。

人生にはアクシデントがつきもののように、高校卒業間際にスキー場で骨折。人より高校生活を長く過ごすことになりました。就職も決まっていたが白紙に戻りました。就1年後には無事高校を卒業して神奈川県川崎市に「いすゞ自動車」に就職が決まりました。最初に配属されたのはディーゼルエンジンなどの試作品の部署で、ここで自動車製造の基礎を叩き込まれました。何よりも恵まれていたのは、工場の近所にあった大学の第二工学部に通わせてもらえたことです。高校は普通科でしたから、機械について一から学ぶことができ、いまでも感謝しています。

大学を卒業した年に、相模原の「セントラル自動車」に転職しました。この会社はトヨタ自動車系の完成車のメーカーでしたから、トヨタとの出会いがここから始まりました。セントラル自動車では、製造部門、生産技術、品質保証など、いわゆる「モノづくり」

言葉の向こうに生涯現役のヒントが見える。

中小企業のモノづくりに応援

小森をはじめ、9人のチーフアドバイザーは全員が60歳以上です。トヨタ生産方式を体得した経験豊富なメンバーが、それぞれの技術で社会に貢献することを目ざしています。会社の理念である「お返し的人生」をともに生きていこうというわけです。

思えば起業当初対象となったのはあまり資金がない企業ばかりでしたから、もうかる仕事ではないことを承知してのスタートでした。まず経営者のヒアリングを通じて企業の意向を把握し、職場環境や安全・品質・生産・原価管理などの面から現場を診断します。診断の結果を報告書にまとめますが、ここまでは無料で、次に診断で明確になった課題に対して具体的な「カイゼン」を提案していくこととなります。利益を上げるという意味では効率は悪いのですが、モノづくりの現場と一緒に工夫し、ともによくなくなっていきたいというのが、私たちの何よりの願いです。

の基本の現場で鍛えられました。苦勞もありましたが現場は活気があって楽しかったです。トヨタ本社の生産調査室に派遣され、半年ほど寮生活を送ったこともあります。一緒に生活するなかでトヨタ生産方式を学ばせてもらいました。この生産方式の強みの一つが「カイゼン」という概念で、国内はもとより、海外にも知れ渡っている言葉です。「カイゼン」とはひとことではいえず、製造現場の問題点を見えるようにするということです。「モノをつくるときに、つくりすぎてはいけない」という考え方を体得するまでには時間がかかりましたが、まだ30代でしたからとにかくどんな欲に学びました。若い世代をじっくり育成する力が社会にあふれていたよき時代でした。

「カイゼン」という天職との出会い

2007(平成19)年に、私の上司に当たる小森社長がセントラル自動車の社長を退任して株式会社カイゼン・マイスターを立ち上げました。その2年前に開業した「新銀行

得は若いコンサルタントよりも高齢者が得意とするところですよ。やはり「年の甲」とでもいうのでしょうか。

毎週火曜日は全員が会社に顔を揃え、情報交換をし、指導先企業の割り振りを行います。また、毎週当番を決めてそれぞれが抱える問題を発表し情報を共有します。会社には上限年齢がありません。「カイゼン」とは常に一歩先を見ることが、終わりのない仕事です。居心地のよい場所で、これからも長く働き続けたいというのが率直な気持ちです。

生涯現役を目指すには何よりも健康が大切ですが、恥ずかしながら体によいことは特にしていません。強いてあげれば喫煙しないことでしょうか。これといった趣味もないのですが、自宅で食べる分くらいの野菜をつくっていますので、家庭菜園とでもしておきますか。とにかく暇があったら会社に来ているのですから、「カイゼン」活動が道楽というか趣味といえるかもしれません。お客さまの安心の笑顔に出会うことが無上の喜びです。

「お返し的人生」という意味では、地域の自治会活動はけっこう熱心にやっています。高齢者も立派に社会の役に立てることを絶えず意識していたいと思います。

最後にひとこと、企業にはムダを排除するアドバイザーをしています。人生には通用しません。むしろムダがなければ面白くありません。だから人生は楽しいのです。